

2016 年 12 月オランダ高齢者住宅・高齢者事情視察 Report by Y.Yamanaka

期間:2016 年 12 月 12 日(月)~18 日(月)

私的視察企画

協力:オランダ現地コーディネーター兼通訳 Ms. Emii Tanaka

為替:1€=126 円 (キャッシュ両替ベース)



Contents -----

- 1 オランダと日本の基礎的情報比較
- 2 Dorcas Winkel 高齢者ボランティアによるセカンドショップ (Aalsmeer)
- 3 City hall of Amstelveen アムステルフェーン市役所 (Amstelveen)
- 4 Buitenveldert Cordaan 社運営の高齢者介護施設 (Amsterdam)
- 5 De Buitenhof Cordaan 社運営の高齢者介護施設 (Amsterdam)
- 6 Humanitas 高齢者施設 (Deventer)
- 7 Zienkenhuis Amstelland 病院、介護ショップ、デイサービス (Amstelveen)
- 8 Hogewey 高齢者認知症施設 (Weesp)
- 9 Flevohuis / Open Hof 介護施設・認知症グループホーム (Amsterdam)
- 10 Flesseman 高齢者住宅 (Amsterdam)
- 11 Amstel Huis 高齢者住宅 (Amsterdam)
- 12 まとめ

1 オランダと日本の基礎的情報比較

	オランダ	日本
面積	約 4.2 万 k m ² (九州とほぼ同じ)	約 37 万 8 千 k m ²
人口	約 1700 万人 (2016 年 8 月)	約 1 億 2699 万人 (2016 年 7 月)
高齢化率(2015 年)	18.23%	26.34%
(2020 年)	19.8%	29.1%
(2030 年)	24.1%	31.6%
平均寿命(男)	79.36 歳(2010-15 年)	80.00 歳(2010-15 年)
平均寿命(女)	83.14 歳(2010-15 年)	86.49 歳(2010-15 年)
合計特殊出生率	1.76(2015 年)	1.43(2015 年)
1 人あたり GDP	44,323 ドル(2015 年)	32,479 ドル(2015 年)
所得税	36.5～52%	5%～45%
消費税(付加価値税)	21%(食品等 6%)	8%
医療費	無料(月々保険料支払)	自己負担(1～3 割)
介護サービス	無料(月々保険料支払)	自己負担(1～2 割)

※データ出典:World Population Prospects IMF 外務省、その他

オランダは介護保険を初めて創設(1968 年)した国でもあり、その介護保険をドイツが参考にし、ドイツを日本が参考にした経緯がある。しかし、先進国はどこも高齢社会の問題を抱え、オランダでも近年介護保険(及び医療)の大きな改正が相次いでいる。北欧諸国と同様に、脱施設化、施設から住宅へというシフトも進んでいる。社会制度や文化が異なるので、一概に日本と比較し良し悪しを述べることはできないが、先行している介護保険の動向は大いに参考になるのではないだろうか。

特に日本が向かおうとしている地域包括ケアシステム(国の制度から市町村の制度への移行)は、2015 年にオランダでも大きく改正され、AWBZ(特別医療費保険)より給付されていた介護は Zvw(健康保険)と Wmo(社会支援)を中心に移行された。Wmo では、自治体が生活サービスなどを判定し、地域の NPO などからサービスが提供される。重度介護(ナースিংホーム含)に関しては国の管轄となる。介護保険料および医療保険料は、日本のように年齢区分せず 1 人ずつ納める必要があるが、必要に応じて利用でき、実際利用した際の自己負担は無料となる。しかし、2015 年の改正では、事業者のコスト的負担も大きくなり、また利用側のサービス量減などの問題もあり、決して順調というわけではない様子が窺える。

＜オランダの住宅事情＞※オランダの社会住宅―住宅セーフティネットのモデル(2009)アンドレ オウヴェハンド(著)よりデータ抜粋

古いデータであるが、2001 年段階で全住宅戸数に占めるオランダの社会賃貸住宅は 36%、全賃貸住宅に占める社会賃貸住宅は 75%と、デンマークの各 19%、43%に対し突出して高くなっている。一般の住宅 95%のうち、社会賃貸住宅 36%、民間賃貸住宅 12%、持ち家 52%であり、社会賃貸住宅の平均面積は 61 m²となっている。

オランダの高齢者住宅の考え方としては、基本的に個々人が自分の生活に責任をもって行動する。食事サービスなどは原則提供せず、ケータリングやレストランの利用は個人の希望に基づいている。個人の自由、選択の自由を重視することから、援助効率は悪く全体的な援助経営の視点からは不経済な部分も見受けられる。物理的なサービス内容が結果的に低くなくても、個人の自由な生活の実現が本人にとって最も大切と考えられている。

施設から住宅へのシフトは進み、原則「高齢者住宅」であり、ケアはオプションとなる。複数個所の高齢者住宅に訪問して感じるのは、日本では要介護 1～2 レベルと思われる人でも「自立」して暮らしている様子が窺えた。町中も杖や歩行器などを利用し、ひとり移動する高齢者が多く、「個人尊重」「自立」を感じるが多かった。

2 Dorcas Winkel Aalsmeer (セカンドショップ)



日時:2016 年 12 月 13 日(火) 10:00~11:00

<https://dorcas.nl/over-dorcas/dorcas-winkels2/>



Dorcas Winkel は、1000 人以上のボランティアの助けを借りて、オランダで 28 の公式ストアを管理。本、おもちゃ、ゲーム、食器、家具など、海外援助のために適している中古商品を取り扱い、収益金で、東ヨーロッパ、中東、アフリカでのいくつかの援助プロジェクトを実施している。ボランティアに条件はないものの、訪れた Aalsmeer のショップはほとんどがリタイアしたシニア層。火・木・土の 10:00~16:00 まで開店。

訪問時は早めに到着(9:40 頃)したが、すでに 10 数名が開店待ちの状況であった。かなり品質の良いものも多く、物価の高い欧州で非常にリーズナブルな設定で売られている。商品は全て寄付品とのことで、ボランティアが 1 品ずつ綺麗にし、巨大倉庫にカテゴリーごとに分類・陳列し販売。ボラン

ティアは全くの無償で業務に従事。従って比較的高齢富裕層の人々が社会的使命感にもとづき参加している様子。陶器類が 1€前後からあり、家庭用品、衣料、おもちゃ、本、寝具、など生活用品はスーパーやデパートにそろっているものがほとんどある。倉庫は 2 階建てでリフトも設置、高齢者には無料貸出できる車いすやシルバーカーなども設置、バリアフリー配慮。2 階奥にはカフェがあり、高齢者の人々が交流・団らんしていた。

場所は少し郊外の工場などがあるエリアのため、東欧諸国からのトラックも多く、ドライバーが自分の家庭用に買い求める人も多いとか。



3 City hall of Amstelveen



日時:2016 年 12 月 13 日(火) 11:00~11:20

<https://www.amstelveen.nl/web/show>

首都アムステルダムとスキポール空港の間ぐらいに位置するアムステルフェーン(Amstelveen)市の市役所に訪問。Amstelveen は郊外住宅地で日本人も多

く居住する比較的小裕福な人の暮らすエリア。一戸建住宅も多い。

昨年大きく改正された介護保険等の資料を頂く。市役所 1 階のロビーは明るくゆったりとしており、テーブルとイスがたくさん設置され、気軽に立ち寄り時間を過ごせるような雰囲気を出している。各資料もカテゴリーごとに見やすく設置されており、受付はホテルのコンシェルジェのように対応している。

オランダの介護・医療制度については、2015 年に大規模な改正があった。オランダの介護保険制度 AWBZ はその名称がなくなり、従来の AWBZ は Zvw(健康保険法根拠の短期医療)、Wlz(従来の介護保険の核の部分で介護が内付けのナースングホームなど長期療養)、そして Wmo(社会サービス法)2015 に振り分けられた。Wmo は、日本が進めようとしているいわゆる地域の資源を使った在宅サービスと言えるであろう。その考え方としては、『自己責任、家族による支援、地域で助け合う、施設ではなく在宅で』といった日本と同様の方向性であることがわかる。

実際には、改正前より利用時間が削減されるケースや、事業者の運営費もカットになるなど、厳しい運営になっているといわれる。

[illegible]

Wmo に関する詳細な情報も。



★Cordaan 社

高齢者や障害者に小規模な在宅サービス(デイや訪問など)、高齢者住宅などを展開。約120拠点で6千人の従業員と2千5百人のボランティア、また医療を含む様々な専門機関と連携しサービスを提供している。



Amsterdam市を含むオランダ各地で介護サービスを展開するCordaan社が運営。高齢者住宅、在宅介護、障害者サービスなど、住宅・在宅を含め展開している。

周辺は Amsterdam 市と Amstelveen 市の境のあたりで高級住宅街が広がる閑静な住宅地(敷地は Amsterdam 市)。自然豊かな環境の中に 4 階建ての施設(築 10 年程)として展開されている。1 階はおもに共有スペース(ロビー、レストラン、ファミリールーム、瞑想の部屋、職員オフィスなど)と、比較的重度(認知症)の居室とデイルーム兼レストラン。建築物としては、欧州らしく共用・居室ともに採光をたっぷり取り入れた自然光が入る仕組み。

入居待機があり、通常は 3～6 ヶ月の待機、認知症ケアを必要とする場合は 12～18 ヶ月必要となっている。

入居者(92歳女性)の居室を拝見する。居室間取や広さは全室同じとのこと。1LDK(キッチン・バスルーム付)で、50㎡前後かと思われる。急きよお邪魔したのにとってもきれいに使っておられた。この方は、当初ご主人と入居されたものの、ご主人は逝去され現在一人暮らし。インターネットも駆使し、語学学習などアクティブな生活ぶりが窺えた。途中支援スタッフが来られるが、高齢にもかかわらずほとんど介助は受けておられないとのこと。

訪問当時は 52 名が入居。退去（死亡）後は 1 週間で部屋を明け渡しが必要。待機者から相談し入居を決めるが、資金的な問題などもありキャンセルになることもある。入居費用は、個人の状況により異なるのでわからないとのこと。

中庭を挟んだ反対側には、同社が運営する高齢者住宅(55歳以上入居可能)があるが、高齢者住宅入居者にも認知症状などがあり、こちらの施設入居を待機している人もいるとのこと。高齢者住宅で介護が必要になれば、在宅サービスを利用



しながら介護を受けることができる。認知症の方も比較的自由に動ける(拘束禁止)ため、重度と思いき方も散見された。建物メイン出入口も自由なので、徘徊に出てしまう方も(極端な例では死亡する場合も)あるとのこと。

訪問時、1 階ロビーでは高齢者が簡単な体操などを行っていた。瞑想の部屋はだんだん使う人もいなくなっている。ボランティアなどが訪れ、さまざまなイベントも実施している。オランダでも外部のボランティアを積極的に取り入れ、入居者のためのイベント等を実施しているところが多い様子である。

北欧も同様だが、施設から住宅へのシフトが進み過ぎ、施設への入居(移り住み)を希望しながら入居できない独居高齢者なども少なくない。オランダは今後高齢化がさらに進み、もともと子との同居の文化がない事情を考えると、日本よりさらに高齢者住宅の重要性は高まるのではないかと感じる。



日本と同様全て撤去の退去後の部屋



回想法の一環か、古い電気製品



瞑想センター 以前は牧師も来訪

5 De Buitenhof Cordaan 社運営の高齢者施設 (Amsterdam)



日時:2016 年 12 月 13 日(火) 13:30~14:30

Cordaan 社運営のアムステルダム市内にある介護施設。正面には平屋のオフィスや共有スペースが入った棟があり、右側には 13 階建の介護施設、左側には 3 階建の認知症棟がある。

介護棟は広めのワンルームにミニキッチンとバスルーム付となっている(30 m²程)。築年数はある程度経過している様子である。その前に訪れた Buitenveldert に比べるともう少し介護の必要性の高い人が対象かと思われる。

他の施設でもそうだが、介護職員は移民系が多くみられる。誰もがフレンドリーで、訪問者にも気軽に挨拶をしてくれる。この施設では、長らくオランダ居住の日本人の方の居室に伺わせていただき、暮らしぶりを伺う(詳細はプライバシー上伏せる)。職員の対応なども特に問題なく暮らしているとのことであった。

1階中央には、地元住民にも開放したレストラン(居住者用のレストランは別途 1 階奥にある)やイベントホールなどがある。X'mas 時期だったので、飾り付けが華やかであった。また、美容室や理学療法室なども設置されている。地域住民開放型のレストランでは、10:00~21:30 まで、ケーキやコーヒーなど、またランチにはサンドイッチやスナックなど、さらに夜には温かい食事が提供されるとのこと。他にも地域住民には、サロンやフィットネスルーム、広場のコンサートやゲームなどのイベントに参加できるようにしている。



重厚感のあるドア



クリスマスシーズンの飾りつけ



オランダもスタッフルームはガラス張り



1階中央入口にある地元解放型レストラン。電動車いすなど
重度と思われる高齢者も仲間と一緒に茶を楽しんでいた

6 Humanitas 老人ホーム (Deventer)



日時:2016 年 12 月 14 日(水) 11:00~13:00

Deventer 市は、アムステルダムから東に 120 km、車で 1 時間半ほどの距離にあるオランダの地方都市。Rotterdam に本部のある高齢者住宅の NPO 法人ヒューマニタスとは関係はなく、独自の運営である。居住者への簡単な支援や話し相手のボランティアをする代わりに居住スペースを大学生に提供するというユニークな取り組みで、メディアを通じて有名になった施設でもある。



到着後、まずはブリーフィングで全体的な話を聞かせてもらう。Humanitas からは、さまざまな企画を考案し実施している Peter、大学生として居住している Sores が参加してくれた。Peter は、これまでも障害者施設や国際的な難民施設などで働いてきた経験があるとのこと。Sores はクルド人で、親族とは離れて住んでいる。大学でコミュニケーション学を学ぶ 27 歳の青年。

Sores のような大学生は 6 人(男女各 3)おり、建物の一部が学生用の個室になっている。また施設裏の一般アパートにも学生が 2 名いて同様の関係を持っている。

1 ヶ月に 30 時間、居住する高齢者たちのために、「良き隣人」として、話し相手になったり、ちょっとした手伝いなどを行う。また、交代で居住者の夕食用の軽食の支度をする(注)。

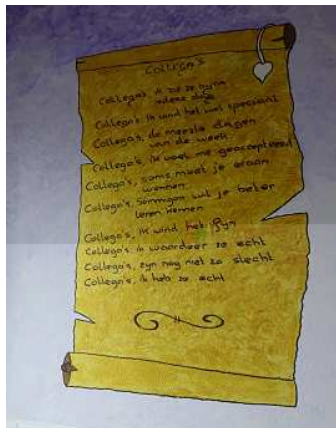
(注)オランダでは、温かい食事(メイン)は 1 日に 1 度、高齢者施設の場合屋に摂るケースもよく見る。朝や夜の食事は、パンとチーズ、ハム程度の軽いものになる。そのため夕食用のパンを焼いたり軽い食事を用意する。

現在居住者は 160 名。建物は、共用部分や渡り廊下のある中央棟をはさんで、H 型に居住スペースがある。建物自体は 1965 年に建てられたもので、すでに 50 周年を超えた。丁寧にメンテナンスされている様子がわかる。そのための公的補助もあるとのこと(国費で年 4 回 1000 ユーロ程度)。

各階に地方の名前をつけるなど、居住区への特徴付けをしている。中央棟の屋上部分には、ソーラーシステムを導入し自家発電もしている。

居住に関わる費用は、個人の状況(保険)により異なるため難しいが、おおよそ自己負担は 800~2000 ユーロ位の幅ではないかとのこと。多くは 900 ユーロぐらいではないか。家賃として支払っている人は 11 人ほどではないか。

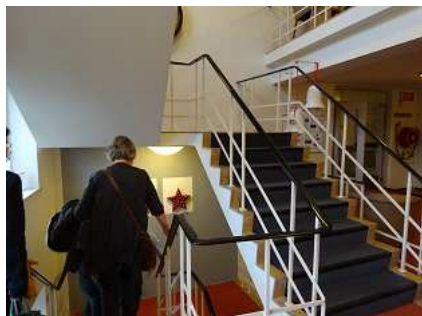
認知症の人用の棟や「ケアホテル」という病院から退院後、自宅に帰れない場合一時的に滞在し介護やリハビリを受ける居室(11 室)もある。日本でいう老健に近い感覚か。そのまま居住に移行する人も多い様子。介護が必要な人は、10 人 1 グループ程度に分かれて、小部屋で介護を受けながら食事をする。もし気が合わない人がいたらグループを変わることも可能。ほとんどの人が Deventer 市の人なので、従業員も方言で話をし、地域で暮らすイメージを続けている。



従業員用のトイレの壁に描かれていた絵
従業員の心得、従業員同士の接し方などが書かれている

ほぼ毎日会う従業員同士、お互いを受け入れ、理解し、
感謝の気持ちをもって接しましょう
時には妥協することも大切

といった内容の様子



50 年経過と思えないほど整備されている



地元プロサッカーチームと連携した入居者
男性によるホーム内のサッカーチームもある



自立棟のレストラン ここで食事摂る人は
10 名程度でほとんどが自室で摂るとか



レンタルで事業者に貸し出している棟
家賃を安くする分、施設や入居者にも
何かメリットを提供してもらっている



レンタルで入居するガーデニング事業
社がホーム内の庭整備も行う



認知症棟 ドアが華やかでわかりやすい



左) 吹き抜けの壁には青空の絵
下は認知症の人々の食事テーブルがあり、
見上げたら青空が広がるイメージ

右) ドアカモフラージュ
両開きのドアだが、Deventer の街並みの写真を
ドア一面に貼り付けている



左)Sores の住む部屋

「とても汚い」と言いつつ入れてくれる
キッチン・バス・トイレ付で十分な広さ

右)館内を回っている途中でも、入居者と気軽に
話をしたり、さっと車いすを押したりと、入居者との
コミュニケーションの良さが窺えた

7 Zienkenhuis Amstelland 病院、介護ショップ、デイサービス (Amstelveen)

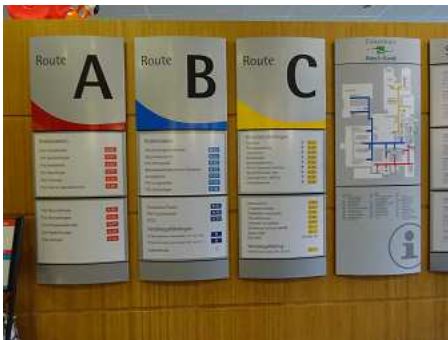


日時:2016 年 12 月 14 日(水) 16:00~17:00

Amstelveen 市の総合病院への視察。

オランダの医療制度は強制加入の保険であるが、保険者(民間)は、自由に選ぶことができるし、変更することもできる。保険料はおおよそ成人 1 人あたり 100 ユーロとなっている。

オランダは GP 制度(家庭医)のため、プライマリ医療は自分の家庭医で対応することになり、病院には家庭医の紹介がないと行くことができない。従って、病院の数は少なく、今回訪れた病院も隣接する 4~5 の市に 1ヶ所という病院である。



加入する保険者によってカバーされる範囲は異なるものの、基本的にプライマリ医療は無料である。介護も同様に、保険料は必要だが、実際利用する際の費用は全額保険でカバーされる。

訪れた病院は、日本に比べ明るい印象であった。受付カウンターで相談できるようになっており、また病院内の表示も記号や色で分かれていて動線も非常にわかりやすい。移民の多い国なので、言葉以外にもわかりやすさを追求しているといわれる。



この病院では、日本人への医療通訳対応もされていた。日系企業などの協力がある。日本人の居住が多いエリアであり、医療というセンシティブな状況に対応するためであろう。

オランダでは、とてもコンパクトな小型車をよく見かける。Micro Car と呼ばれているようだが、免許は必要なく、歩道、自転車道、一般車道の通行が可能となっており、身体障害者・高齢者用である(健常者は原則利用できない)。アムステルダム市では、直立・歩行が困難な住民にこの車をレンタルする仕組みもある。オランダの身障者、高齢者の自立に大いに役立っているとのことである。

2 人乗りで後ろには車いすが搭載できるようになっている。
公共施設だけでなく、一般住宅の前などでもよく見かける。





病院の前の介護ショップ

介護用品も必要性が認められれば、保険で全額カバーされる

展示の多くは歩行補助具（車いす、シルバーカー、歩行器など）であった。オランダではどこでも ADL の低下した高齢者が補助具を使ってひとりで外出する風景を多く見る。「自立」の意識が高いと感じる。



病院前的高齢者住宅

介護事業大手 NPO 法人 Amstelring 社の施設

駐車場をはさんでデイサービス

16 時過ぎに送迎車に乗り込む利用者

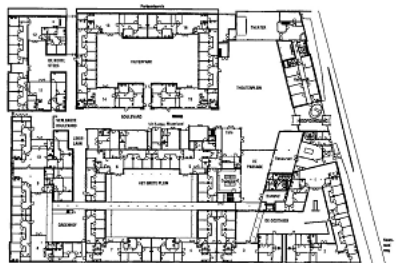
デイサービスの風景は日本と変わらない

8 Hogewey 認知症高齢者施設（Weesp）

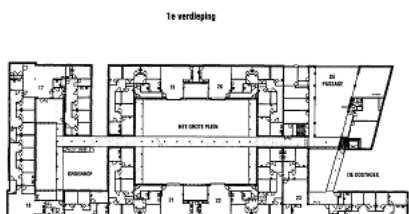


日時:2016 年 12 月 15 日(木) 11:00~12:30

「認知症村」として世界的に有名になった『Hogewey』は、Amsterdam 市の東隣の Weesp 市にある。古くからある町ということだが、Hogewey のある周辺は巨大な工業団地と集合住宅団地のある周辺かと思われる。集合団地からの雰囲気では、どちらかというブルーワーカー層が多いように見受けられた。工業団地には日系企業の名前もいくつか見られた。



開設は 2009 年、敷地は 12,000 m²とかなり広いエリアを建物で囲い、その中に街をひとつ作ったというイメージであろうか。メイン玄関は職員が配置され厳重にセキュリティは管理されている。見学者には、Map と注意事項や Hogewey の解説を記載した資料をくれる（英語版あり）。世界中から視察が多いようで、スタッフも慣れている様子。しかし、認知症の人の施設であることには変わりなく、注意事項を確認される。



べる。

ひとつの町といっても全く違和感のない造りで、建物自体は 1 階部分と 2 階もある部分がある。152 人の入居者でスタッフは約 250 人とのこと。居住棟は全部で 23 に分け、1 ユニット (Home) が 6~7 人で構成されている。ユニットにはそれぞれコンセプトがあり、文化的 (Cultural)、伝統的家庭的 (Homelytraditional)、フォーマル (Formal)、都会的 (Urban) などがあり、入居者は自分の志向に合うカテゴリーを選

ユニットごとに玄関があり、それぞれデザインも異なる。共通のキッチンやリビング、ホールがあり、1つの廊下に 3 室×2 (その中央に共用部がある) が要準的だが、4 室と 2 室になったり、6 室まっすぐなところもあったりする。

ユニット (Home) ごとに、スタッフやサポーターによって洗濯やアイロン、修繕などの家事が行われる。食事もユニットごとに、入居者も加わり自分たちの生活習慣や個別の好みに合わせて作られている。



建物の2階をつなぐブリッジ 重度の車いすの方の散歩をされている家族もおられた



メイン玄関から近いところにある Passage スーパーやレストラン、カフェがある



Passageにあるレストラン オシャレで気軽な雰囲気



レストランのメニュー 街中のレストランより少しリーズナブルか



ミートボールスープとパンを頂く とても美味しかった



メイン玄関から入ったところの広場



商店街にあるCD ショップ (店員は職員)



広場には催し物の案内もあり、無料で参加できるイベントから、有料のツアーなどまで(お買い物ツアーなどもある)



敷地の外側から外観(車窓より)
Mapによると各居室が外側に向いているケースも多く、窓の扱いがどうなっているのが気になるところである

9 Flevohuis /Open Hof 介護施設・認知症グループホーム (Amsterdam)



日時:2016 年 12 月 15 日(木) 15:00~15:30

日本の特別養護老人ホームのような施設といえる。建築年数は相当経年しているかと思われる。Flevohuis (一般介護室) 94 室、Open Hof (認知症グループホーム) (6 人×14 ユニット)。ショートステイも可能。また、診療所や訪問介護などの在宅介護機能も併設している。

看護、介護スタッフ、高齢者医療の専門家、理学療法士、作業療法士、心理士、言語療法士、ソーシャルワーカーなどの専門職が適切なケアとサポートを提供。



認知症グループホームに伺う。ちょうどお茶の時間で、共有スペースであるリビングルームに 10 名程度が集まっていたところであった。職員は施設制服を着用し、心身機能が重度な方も多く、受け入れ態勢はナースィングホームに近いと思われる。職員は声掛けなど気配りをしている様子もあるが、重度者が多いゆえか、多忙そうに見えた。ユニットごとに

個室ではあるが、サニタリールームは共有。

10 Flesseman 高齢者住宅 (Amsterdam)



日時:2016 年 12 月 16 日(金) 17:00~18:00

運営事業者 Amsta は、Amsterdam 中心の介護事業大手 NPO。高齢者だけでなく障害者分野も対応している。在宅、施設、認知症グループホームなど複数展開。

場所はアムステルダム中央駅や中心地ダム広場からも徒歩圏内にある観光地「ニューマルクト広場」に面した非常に好立地である。また、中華街入口にもなる。入居者は基本的には地元のオランダ人(欧州人)がほとんどのようだが、エスニック系の方もおられる様子。住宅分類としては「社会住宅」となり、Amsta が住宅協

会から建物を賃貸して運営(4 階までの介護住宅)する。5 階以上は一般住宅。

1 ルームが 42 室、2 ルームが 4 室。キッチンとバスルーム付。家賃は月 400~450€程度とのことだが、入居者の所得・資産に応じて住宅補助がある。建物自体は古いもので、1 階にはレストランがあり地元高齢者にも開放されているが、住宅入口を通過してからでしか入れなく、OPEN な雰囲気ではないかもしれない。訪問時夕食を頂いたが、ほぼ全員が居住者であった。多くの人がワインなどと一緒に食事をとっていたが、ひとりでテーブルに座る人、大きなテーブルで大勢と座る人などいろいろであった。

他に提供される設備とサービスは、ホーム 케ータリング、ヘアサロン、ランドリー、理学療法、ショップなど。



左) メイン玄関は奥にもう1つドアがあり入ると
入居用カウンターになっている
その前を通らないとレストランには行けない

右) 建物サイドから
古さを感じる



レストランの窓からは、観光地であるニュー
マルクト広場がよく見えるので、行きかう人々
を眺めることができる

夕食を試食。2種類から選べる
典型的なオランダ料理をチョイス
スープやデザートなどもある
高齢者を考慮してか柔らかい料理

11 Amstel Huis 高齢者施設 (Amsterdam)



日時: 2016年12月17日(土) 18:00~19:30

Flesseman 同様に運営は Amsta による。建物はリノベーション会社が持つものといわれる。Flesseman と異なり、比較的自立度の高い高齢者向けの住宅となっている(社会住宅)。本人の所得・資産に応じて同様に住宅補助がある。2014年6月開設で120戸。入居対象は80歳以上であるが、70歳以上でわずかな介護の必要性があれば(支援レベル)可能となっている。ここではケアは外付け(居宅介護)となる。

家賃は400~450€程度(これに対し個人に合わせた住宅補助がなされる)

夕食をレストランでいただいた。前日の Flesseman に比べると確かに自立度の高い人、また少しオシャレな明るめの人が多い印象であった。レストランは、1階の入りやすい位置にあり地域住民にも開放されている。高齢者住宅のレストランというより、一般のレストランの雰囲気であらゆる気軽さがある。ただしレストランでの食事は夜のみ。他は自炊かケータリング利用。



トラムが通る幹線道路と大きなアムステル川の角にあり目立つ建物

1階レストランは明るく開放的で一般の人でも入りやすい

メイン玄関左にはゆったりしたラウンジ



アラブ系料理らしい 食べやすく美味しい 飲み物メニューも豊富でリーズナブル

職員がメニューを各テーブルに
持ってきてくれる 2種からチョイス

12 まとめ

今回の視察は、プライベート視察(単独)となったが、オランダ在住の友人のおかげでたくさんの施設や高齢者の生活に関わる側面を見ることができた。北欧に並んで社会福祉制度が充実しているといわれるオランダであるが、どこも財政が厳しいのは同様である。また、それぞれの国の文化や社会事情があるので、一概に日本と比較して優劣や善し悪しは語れないが、いつも感じるのは、身体だけではなくメンタルな部分における高齢者自身の「自立」感である。先進諸国の高齢者を見てみると、自身で自立を促すことが基本であり、特に家族への依存はほとんどないと言えるのではないかと。また家族側も精神的な支えや愛情は注ぐが、介護そのものを自らするわけではない。高齢者自身も「制度を使うのは必要になったから」である。街を歩いていると、日本以上に歩行器を使った高齢者がひとりで歩いている姿を多く見かける。それだけ本人の自立心と社会の許容力があるのだと感じる。

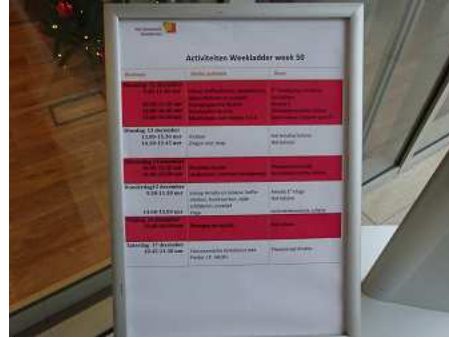
高齢者の住まいに関しては、どこも基本的に外部にオープンな姿勢をとっていることが窺えた。まずレストランは地域住民に開放しているのが基本である(入りやすい・にくい差はあるが)。そして、ボランティアを多く活用している様子が窺えた。

街中でも高齢者施設でもペット(多くは犬)を連れている人が多い。「ペットは家族」であり、一緒にいることに違和感はないのだろう。たとえば、Amstel Huis のレストランでは、数人が犬を連れて食事をしていた。犬もおとなしく床で伏せている。それに対し誰もクレームもいわないし、日常の風景と捉えられた。

また、さすがに欧州と言えるだろうか、施設職員は多国籍である。入居者は圧倒的にオランダ人(欧州人というニュアンス)が多いようだが、エスニック系(日本人含む)もいる。今回は、プライベート視察ゆえ、制度的なところに踏み込んで調査ができていないが、いずれにせよオランダも制度改正が近年なされているので、これからどのように変化していくのかは、未知数といえるかもしれない。ちなみに高齢者住宅の分類は、包括的介護と外付介護(日本の有料老人ホームで言うと、介護付と住宅型)の分類のようであるが、包括型はなくしていく傾向のようである。包括型は特養ホームに近いイメージと言えるだろう。また認知症グループホームは1ユニット6人という考え方が多い。

オランダは早くから「安楽死」も可能な国である(ただし実施するにはハードルはかなり高い)。

今後さらに高齢者人口が高まり、施設から住宅へのシフトを進めて、どのような対応がなされていくのか興味深い。「施設に入居したくてもできない」という声も聞かれた。これは昨年のスウェーデンでも「行き過ぎた在宅主義の副作用」として施設希望に対応できていない現状があった。どの国もパラダイスはなく、さまざまな課題を抱えているということである。オランダも定点観測していきたい国のひとつである。



左) オランダの救急車

高齢者施設の玄関に止まり、まさしく救急搬送されるところであった
オランダの救急車は税金（無料）ではなく医療保険から全額カバーされる

右) 高齢者施設でのアクティビティ案内 地域住民参加可能なケースも多い



どこでも歩行器を利用した高齢者の外出をよく見かける。街中は決してバリアフリーではないが、手助けしてくれる一般市民は非常に多い。心のバリアフリーは日本以上だと感じる